

魚見台

レーダーやソナー装置が登場する以前、屋島の漁師は魚見台（「魚の見張り台」）観測所を使って、近海の魚群を判別していました。これは、一団の波紋や影などの海の変化、あるいは鳥の群れなどのしるしによって見つけられました。魚群らしきものが見つかったと、その位置が下で待つ船に伝えられ、乗組員は網を投げる場所を知ることができました。伝達は、魚がびっくりして逃げてしまわないよう、主に旗、反射光、火、煙の信号を使って行われました。

その何世紀も前に、同じ見張り台に衛兵が配置され、瀬戸内海の島々の間を通過する船を監視し続けていた可能性があります。7 世紀以降、主に唐や朝鮮半島の新羅といったアジアの敵対王国による侵略から、当時の首都であった明日香（現在の奈良市近郊）を守ることを目的とした前哨基地のネットワークの一部として、屋島に山城（砦）が建てられました。実際に侵攻されることはなく、衛兵の見張り台は徐々により平和的な目的に転用されました。屋島では 4 か所の魚見台が発見されており、これらは展望台へと変わって、訪れた人はそこから魚や鳥を見つけたり、瀬戸内海を横切る船を眺めたりすることができます。